

「WTO農業交渉 2004」 主要国・日本の農政改革とWTO提案

服部信司著（農林統計協会）

服部信司氏の著書を読むのはこれで3回目である。1冊目は「ガット農業交渉」（1990年富民協会）、2冊目は「WTO農業交渉」（2000年：当書の前身本）そして今回である。農業関連の図書はかねてから興味を持っていたせいもあってこれまでアットランダムに拾い読みをしてきたが、読む本の数が増えるにつれ農業関係は基本的なことや大事だと思われる制度・実務・政策に即した解説本が多くなく、またこれだけ農業の国際化が進展して様々な問題が発生しているのに、日本と比較するための外国の農業制度や政策についても詳細に説明したものが少ないという不満が高まっていた。とりわけガット研究に関するものは、「ガット文書が加盟国政府以外には秘密扱いで、発効後6ヶ月たてば一般に公開されるが、これを政府関係者以外が日本で入手することは困難であった」（高瀬保著「ガットとウルグアイラウンド：WTOの発足」東洋経済新報社）ということもあり、皆無に近かったといえる。そういう時に服部氏の著書にめぐり合った。著者の本の特徴は、WTO交渉について、背景から経緯・結果及びそれが持つ意味まで、コンパクトかつ的確に基本的な事項が実務的に説明され、妥結に至る外国の農業政策の変化や農業事情の説明が付記され、更に日本の農業政策の変化とWTO交渉における日本の主張の説明がなされている。ボリューム的には2百ページちょっとの小さな本だが、WTOをめぐる農業交渉と日本及び世界の事情は、この本1冊で骨太にしっかり理解できる好書である。时期的には、1993年のウルグアイラウンド交渉妥結から、2004年8月の農業交渉枠組み合意まで、目下、農産品・非農産品にわかれてド

ーハラウンドにおいて交渉が進められているこの時期には本書はぴったりのタイミングであるといえる。

本書の中で著者は、米国やEU等の国際農産物貿易交渉に臨む取組姿勢や、ウルグアイラウンド以降の国内対策・農業政策を把握しながら、各主要国が協調や妥協の中で自国の農業を守る姿勢を貫こうとしている点や、場合によっては自国中心主義的なパフォーマンスもありうるという冷徹な国際交渉の実態を簡略に記載している。また現状のWTOルールでは、輸出規律については明確なルールがなく、輸出補助金は今回交渉のテーマになっているし、それ以外にも輸出税（EUは95年に国際穀物価格高騰で域内の飼料不足を懸念し輸出税を課した）、輸出制限・禁止（73年米大豆、丸太等）、輸出国家貿易企業・輸出信用規律問題等を指摘し、国際貿易には、輸入だけでなく輸出に関する規律の確立も必要であることを主張している。本書は、日ごろの新聞情報だけでは発見できない国際農産物貿易をめぐる問題や海外各国の農業政策について、実務に即した重要な情報をコンパクトに得ることができる点で貴重である。

世界には食料自給率を日本のように40%にまで落としてしまっている人口大国はない。そういう中で単純に生産性の低い農業は国際競争下で淘汰されてもやむを得ないという発想でいいのだろうか。「世界からいつでも好きなだけ食料を買える」という輸入国にとっての好都合はWTOにおいてはルール化されていない。そろそろ「何のための自由貿易か」を考える時ではないだろうか。

（2004年10月 2,500円＋税 231頁）

（田中一郎）